

❦「西方水かけまつり」とは

三春町の無形民俗文化財に指定されている西方水かけまつりは、どのような理由で始まり、どう受け継がれてきたのでしょうか。

言い伝えによれば、西方水かけまつりが始まったのは戦国時代・天正年間（1573～1591年）にまで遡ります。当時の三春城主・田村氏の武將で西方領主の千葉紀伊守が領民の士気を鼓舞するために始めた神事がそのルーツと言われています。また、集落の井戸の水を全て払ったところ疫病が収まったことから、疫病退散を願って毎年行われるようになったとの言い伝えもあるそうです。かけあう水がなくなると泥までかけあう様子から「泥かけまつり」とも呼ばれます。

祭りはその後、集落で新たに結婚した若者の祝福や、集落の鎮守である塩竈神社への参拝、新年の厄除け、五穀豊穡、子孫繁栄、村内安全など、多岐にわたる願いや祈りが込められ今日まで大切に受け継がれてきました。



CHECK!

まつりの流れ

かつての祭りでは、西方地区で前年に新たに結婚した男性の家を「宿（やど）」と称し、まずはその宿に集まって祝宴を上げていました。現在は宿に代わって西方公民館を祝宴の場としています(①)。宴の後になると、祭りに参加する男性たちは集落の南を流れる大滝根川で身を清めたのち(②)、地区の鎮守である塩竈神社の150段弱の石段を駆け上がり参拝を経て(③)、地区の一角にある井戸「行井戸（ぎょういど）」へ移動します(④)。井戸の水をかけあい、井戸の水がなくなると、井戸脇の田んぼに張られた水をかけあいます(⑤)。



時代と共に祭りの参加資格も変遷

西方水かけまつりに参加できるのは長い間、西方地区の家庭に生まれた20歳から34歳までの長男だけと決められていました。しかし、後継者不足の影響から約10年前に長男のしぼりを撤廃。さらに数年前からは年齢の上限を40歳に引き上げるなど、祭りを存続させるために参加資格を変更しながら受け継がれています。